

やまなし文学賞 青少年部門 佳作

夕焼けの約束

秋山晴信 作

「え？ 医学部、お前が？」

「患者いじめて喜んでそう」

「もっと向いてる仕事あるって」

進路希望調査の時には、必ずこう言われる。地元の大学の名前を書き、その直後に医学部医学科と早口言葉のように語感の良い六文字を添える。周囲の友達たちはそんな僕の進路希望調査の用紙をひよいと持ち上げて笑う。周りの雰囲気に合わせて、僕も

「酷いこと言うなよ！ これでも本気で目指してるんだぞ！」

と無駄にオーバーなりアクションをする。比較的、クラスの中でも口数が多くて騒々しい人間として通っていることもあり、僕が焦ったり困ったりする様子を大げさに見せると、友達たちはますます笑顔になる。そんな決まり切ったやり取りを、進路希望調査のたびに繰り返していた。

帰宅して、記入済みの進路希望調査の用紙をかばんから取り出す。このようなタイプの書類は、高校生にもなって保護者のサインとハンコが必要になるから、面倒だ。自分の進路くらい、自分一人で決めさせてもらいたいなあと思いつつも、ルールなので仕方がないと割り切って、母に用紙を手渡す。母はさっと目を通すと、抑揚のない声で言う。

「もっと上の大学目指しなよ。受かる・受からないとは別として、最初からハードルを下げるのは良くないことだ。しかも、県内の大学じゃ社会勉強もできないよ。どこか遠いところで、一人暮らしをしたほうが、後々ためになると思うなあ」

夕飯前の一番忙しい時に大事な話を振ったのがいけなかった。母はダイニングテーブルの上で、書類から手を離すと、そそくさとキッチンに戻っていく。進路希望調査の紙が、ひらひらと宙を舞いながら、静かに机の上に着地する。

「ちょっと、考えてみるわ」

僕はそう言って、机の上から用紙を拾い上げる。キッチンを出て、階段をゆっくりと上がりながら、用紙を見る。右下の部分が少し水気を含んでしおれていた。きっと、母は濡れた手で紙に触ったのだろう。一段上の場所にかけた足が、一瞬、止まった。

二階の自室に入り、後ろ手でドアを閉める。早速、机に向かい、紙に対して消しゴムを垂直に立てる。消しゴムの音は意外に大きい。紙の歪む音と、ゴムが変形する音が重なって、

不思議な音色を奏でた。

消しゴムから手を放し、代わりにシャーペンを握る。再び出現した空欄の前に、僕の手が止まる。何を書くのが正解なのかわからなくなってしまった。もっと似合う仕事を、もっと高いレベルの大学を、もっとためになる進路選択を……。頭の中に『もっと』が次々と浮かび上がる。

（どうしよっかなあ）

シャーペンを持ったまま、椅子の背にもたれかかる。ふと部屋の窓から外を眺める。数学の問題が解けない時や集中力が切れた時にする、僕の癖だった。たまたま、その日は天気が良く、綺麗な夕焼けが見えた。

（でも、約束したしなあ）

頭の中に、幼い日の記憶が蘇った。

僕がまだ幼稚園生だったときの話だ。

「よく来たなあ！ 飴、舐めるか？」

祖父は僕のことをとても可愛がってくれた。家からあまり離れていない場所に祖母と二人で住んでいた祖父を訪ねると、祖父はいつも笑顔で迎えてくれた。祖父が必ずくれるのは、真っ黒で大きい球体に茶色のストライプのかかった飴だった。僕が喜んで

「うん！」

と頷くと、祖父は

「一つだけだぞ、一つだけだからな」

と言って、自分から食べるかどうか尋ねてきたにもかかわらず、惜しむような顔をしながら、飴をくれた。幼稚園生の小さな口に不釣り合いな大きい飴は、口に含んでもしばらくの間、味がしなかった。唾液が足りていなかったのだ。ところが、ある一定の時間が過ぎた途端、甘さを通り越した形容し難い味が口内に広がった。抜けたばかりの前歯の歯茎をちょんちょんと触られているような、頭の奥を金槌でこんこんと軽く叩かれているような、そんな感覚だった。

目をぎゅっつつぶって甘さに耐える僕の初々しい反応を見ると、祖父は

「面白いなあ。やっぱ、可愛いなあ。俺も食べちゃお」

と言って、ポケットの中からもう一つ、同じ飴を取り出した。袋を開けようとしたその時、
「ダメ！ ダメですよ！ まだ、注射もしてないんだから！」

と大きな声が聞こえた。別室で裁縫をしていた祖母だった。祖父は顔をしかめながら、

「へいへい、わかった、わかった」

と空返事をし、重い腰を億劫おっくうそうに持ち上げた。祖父はゆつくりと、備え付けの棚を開けた。

祖父の家の棚の中からは、鼻の奥をツンと刺すアルコールの臭いがした。

「ちゃっちゃと終わらせて、どこか遊びに行こうな！」

祖父はそう言って、棚の奥から黒に限りなく近い青色の袋を取り出した。そして、おもむろに袋の中のアルコール脱脂綿と小さな注射器を取り出した。

「地味にイテエんだよ、これが」

祖父はそう文句を言いつつ、上着をまくった。その下には、肋骨が浮き出た弱々しいお腹なかがあった。手慣れた様子で注射器の安全キャップを外し、へその下を脱脂綿で拭いた後、注射器の針を刺した。瞬きまばた一回のうちに、祖父は注射器内の液体を押し出して、針をスッと引き抜き、脱脂綿で再びお腹を押さえた。僕はその様子を、じっと見ていた。

その後、僕は祖父と一緒に遊びに出かけた。

祖父の趣味は一言で言えば『工作』だった。僕が作ってほしいとお願いした電車の模型や折り紙など、比較的小さなものは一日二日足らずで作り上げ、僕を喜ばせた。眼鏡をかけることに憧れていたときには、古い眼鏡のレンズをハンマーで叩き割り、伊達眼鏡だてにしてくれたこともあった。視力が低下した今では、眼鏡なんてかけたくもないのだが、そのときは随分とうれしかったものだ。

また、祖父はそういった小さなものに限らず、大きなものの『改造』も好きだった。自分の家の壁をぶち抜いて趣味専用の部屋を増築したり、トタンでできた屋根の上に木材を敷いてウッドデッキにしたり、どこからか配線を引いてきて天井に扇風機を埋め込んだりしていた。

さらには、あまり大きな声では言えないが、車の改造もしていた。遊びに向かう際に乗っていた車も、実は既存製品に手を加えたものだった。そのせいか、普通の車よりもやけに揺れが大きく、排気音もうるさかった。祖父と車で遊びに行くときは、酔い止めが必須だった。

「ついたぞお」

祖父は遊び場につくと、僕を助手席から持ち上げて下ろしてくれた。改造によるものなのか、既存の規格なのかはわからないが、祖父の車はやけに車高が高かったため、幼稚園生の僕は自力では降りられなかったのだ。

祖父と僕の遊び場は、すでに閉店したバチンコ屋の広い駐車場だった。不法侵入にならないのか、今思えば非常に怪しいのだが、きつと祖父のことだから何か伝^{つて}手があつたに違いな^い。そんな遊び場には、当然のことながら、祖父と僕以外に誰もいなかった。四十車両以上駐車可能な広いアスファルトの上すべてが、僕と祖父の二人だけのものだった。秘密の場所を二人だけで共有しているような気がして、なんとなくかっこいいなあ、と思っていた。

僕と祖父は、いつも、ラジコンで遊んでいた。先述の通り、祖父は工作やそれに伴う改造が大好きで、ヘリコプターのラジコンを作っては、この遊び場で試運転を行っていた。祖父のラジコン愛は尋常ではなく、部屋に飾られている作品に触れると、かなりきつく怒鳴られるくらいだった。その理由は後になって知ったのだが、自作のラジコンの中にへそくりを隠していたからだそうだ。へそくりを隠したことを忘れて、遊び場でラジコンを飛ばし、万札ごと炎上して大騒ぎという事件もあつたが、とにかくそれだけ、祖父はラジコンを愛していた。

そんな祖父が、幼稚園生の僕にラジコンを触らせてくれるはずがなかった。

「やらせて、やらせて。一回でいいから！」

「お前が大人になってからな」

「大人って何歳？」

「え……。そ、そうだなあ……。大人は大人だよ」

「答えになってないよ！ もう！」

そんな会話を繰り返しながら、ひたすらラジコンを飛ばし続ける祖父を、時折言葉を交わしながら、何時間も空を横切るラジコンを見続けていた。

そんな遊びの内容だったからか、何十回も一緒に遊びに連れて行ってもらったにもかかわらず、やっていることはいつも同じでほとんど記憶に残っていない。飛ばし始めは真剣で、上手く離陸できると大はしゃぎし、墜落すると清^{すがすが}々しいくらいに悔しがるという一連の流

れをずっと繰り返しているだけだった。祖父は基本的にずっと空を見上げていたため、僕もその真似まねをして、空を見上げてラジコンを追っていたが、すぐに首が痛くなってしまった。祖父がなぜあんなにも長い時間、顔を上げていられたのか、今でも謎のままである。

ただ、そんな中途半端で曖昧な記憶の中に、一つだけはっきりと残っている会話がある。

「ねえ。いつも、なんで注射してるの？」

僕は祖父の飛ばす黒いラジコンを目で追いながら、何の気なしにそう尋ねた。昼下がりに祖父の家を出たのに、気づけば空が赤らみ始め、黄昏時たそがれになっていた。青色と橙色だいだいが綺麗に移り変わっていく夕焼け空と、祖父の飛ばすラジコン。まるで、青色とオレンジ色の絵の具を溶かした水に墨汁を一滴垂らしたような光景だった。紫から青へ、青から橙へ、橙から黄色へと、色を渡る黒い一滴が、一瞬、ガクンとあらぬ方向に曲がった。

「あ」

そうつぶやく間に、祖父のラジコンは元の軌道に戻っていた。さすがプロだなあ、カッコいいなあ、と僕は呑気のんきにそう思っていた。

「びよーき。びよーき」

祖父はぼつりとそう言った。僕は祖父の方を見た。祖父の二つの目はまっすぐ空を見つめていた。僕もすぐに視線を戻そうと思ったが、できなかった。その時の祖父からは、不思議な引力が生じていた。僕はそれに吸い寄せられるようにして、祖父の顔を眺めていた。

「じゃあ、僕が大人になったら、治してあげるよ」

幼稚園生の戯言たわごと。その場の思い付き。パツと口をついて出た軽い夢。だが、祖父はそんな僕のとるに足らない一言をしっかりと受け止め、そして、真剣に返事をしてくれた。

「俺なんか治してもしょうがないぜ？ お前はもっと前向きなことをしろ」

「前向き？」

「そうだ。老い先短い年寄りを救って何になる。助けるならもっと若い奴やつにしとけ。お前がいつも行ってる病院の先生みたいな医者になれ。そっちの方が、絶対、意味がある」

「でも、僕のお医者さんはあんまり優しくないよ？」

「だったら、お前が優しい医者になれ」

「……わかった」

「よろしい」

まだ物心もついていなかったこの頃の僕は、ほとんど会話の意味を分かっていなかった。とにかく医者になればよいなどという浅い理解だった。だが、十年以上前のこの短い会話を覚えているということは、幼いなりにも、何か心に響くものがあつたのだろう。祖父はまだ空を見上げていた。結局、一度も、僕の方に目を向けることはなかった。

しばらく沈黙が続いた後、

「よし、帰るか！」

と言って、祖父はラジコンを丁寧に着陸させた。祖父はやっと僕の方を向いてくれた。同年代のお年寄りに比べても、明らかに多いしわをさらに増やししながら、笑顔を見せてくれた。すでに半分くらい盆地の向こう側に隠れてしまった太陽が、薄くて短い祖父の白髪を^{だいたい}橙色に染めていた。

「またやらせてくれなかったあ！」

「大人になったらな！」

「だから、それ、いつ？」

「お前が医者になったとき」

「ずっと先じゃん！」

そう言って、駄々をこねる僕の両脇に腕を通し、祖父は愛車の助手席に僕をちょこんと座らせた。僕のやりきれない思いを封じるように、祖父は僕の小さな体の上からシートベルトをしめた。

帰り際、車の窓から見た空は、先程とは違っていた。たった数分の間に、大きく色を変えてしまう夕焼けは、綺麗^{きれ}だった。改造車特有の激しい揺れと排気音のせいで、眠たくても眠れなかった。まどろみながら眺めたあの空を、今でもはっきり覚えている。

それから間もなくして、祖父は入院した。

だが、ちょうどその時、僕は幼稚園の年長だった。地元にある小学校を受験しようとしていたため、その準備で忙しく、なかなか祖父のお見舞いに行く時間が取れなかった。身内が病院で何日も寝泊まりしているということ自体、初めてのことであったため、僕は入院という言葉の重さをまったく理解していなかった。

祖父が入院してから一カ月ほどしてから初めてお見舞いに行った。

「よお！」

思いのほか、祖父は元気そうだった。いろんなものが綺麗に整えられた大きな病室と、淡青色のカーテンに囲まれたベッド。その上に寝ころんだ祖父は、カーテンよりも少し緑っぽい患者服を着ており、殺風景な空間と一体化していた。よく見てみると、頬の肉が少し落ちてしまっはいたものの、はにかむような笑顔と飄々とした態度は入院前と変わらなかった。病室に来るまでは完全に緊張していた僕だったが、その気持ちが一気に緩んで、代わりに好奇心が湧いてきた。

「手術したの？ 痛かった？」

「寝てたからわからん」

「どこを切ったの？」

「お腹」

祖父はそう言って、患者服のリボン結びをほどき、お腹を露わにした。だが、その様子は、家で注射を打っていた時とは全く異なっていた。開腹手術だったのだろう。大きな傷痕の上に、サランラップのような薄い半透明の膜が二、三カ所に張り付いていた。

「うわあ……」

僕は目を逸らした。祖父の明るい様子は見せかけなのだと、この時ようやく理解した。隣にいた母が、

「子供に変なもの見せないで！」

と祖父を諫めていた。

その後も祖父はいつもの調子のまま、色々と話しかけてくれた。だが、僕は窓の外を見ながら、短い言葉を返すだけだった。あの時、遊び場で空を見上げていた祖父の気持ちが、なんとなくわかったような気がした。

そこからはあつという間だった。小学校の入試の直前に、祖父は亡くなった。両親は僕に氣を使って、受験が終わるまで祖父の訃報を黙っていてくれた。おかげさまで、小学校受験は無事、合格できた。受かった瞬間は大喜びしたが、それは束の間の喜びだった。すぐに祖父の死を伝えられ、プラスの極限に飛んでいた感情の値が、一瞬でゼロに収束した。

「卒園式にも、入学式にも、必ず行くからな！」

と意気込んでいたにもかかわらず、それは叶かなわなかった。

幼稚園生が喪服など持っているはずがないので、なるべく正装っぽい格好に、申し訳程度の黒い靴下をはいて、葬式場に向かった。会場の駐車場には、祖父の乗っていた車によく似た、ごつくて大きい車両が所狭しと並んでいた。式場に入ると、思ったより多くの人がいた。孫の相手をしながら、誰もいないパチンコ屋の駐車場で一人黙々とラジコンを飛ばす祖父の姿からは、とても考えられない光景だった。意外と、祖父の人間関係の幅は広がったようだ。

僕は祖母と一緒に棺桶かんおけの前に並んだ。その中にはつい数日前まで祖父だったものが横たわっていた。隣で、祖母が言った。

「きつと、受からせてくれたんだよ」

僕の小学校受験のことを言っているようだった。

「ああ……うん」

とりあえず、そう答えておいた。実際には、祖母の言葉は右の耳から左の耳へと抜けていくだけだった。僕の脳みその容量は、目の前の祖父の遺体についてのことではいっぱいだった。死に化粧があまりに整っていたせいで、ひょっとしたら、次の瞬間には

「よお？ 驚いた？」

と言って起き上がりそうな感じだった。僕はまだ、祖父が死んだという事実を受け止めきれていなかった。

その後、葬式は着々と進み、いよいよ火葬の段階にまでやってきた。祖母は、

「好きだったからねえ」

と言って、棺ひつぎの中に、いつもの黒い飴あめをこれでもかと言うほど大量に入れていた。親族は皆、一人一言ずつ別れの言葉を言いながら、惜しむようにして、祖父の棺に何かを入れていた。僕にもその順番が回ってきたが、何を言えいいのかわからず、棺桶かんおけに入れられるようなものも持っていなかった。そこで、僕はとつきに、ポケットの中にあったハンカチを取り出して棺に入れようとしたが、母に止められてしまった。

祖父は骨になった。教科書や図鑑で見る人骨とは違って、所々足りない部分もあったが、全体の外観としては整っていた。あんなにガリガリでやせ細っていたのに、案外、中には色々詰まっていたのだなあ、とか、もとの外見は違っても、燃やしてしまえばみんな同じなんだなあ、とか、祖父とは全く関係ないことを、やけに冷静に考えていた。高校の公共の授業で習ったが、このような心の動きを『防衛機制』というらしい。僕は無意識のうちに、祖父の死を拒絶していたのだった。

高校生になって知識が増えてくると、あの時の祖父がどういう状況にあったのかわかった。母曰く、祖父は五十を過ぎたあたりですでに膵臓癌すいぞうがんを患っていたそうだ。膵臓はしばしば『暗黒の臓器』あるいは『沈黙の臓器』と呼ばれるように、異変があっても自覚症状が出にくく、病気の早期発見が難しい。そのため、気づいたときには手遅れ状態になっていることも多い。祖父もその例に漏れず、違和感を覚えて診察を受けた時には、すでに取り返しのつかない段階になっていたそうだ。僕が生まれる前には、余命宣告までされるほど、予断を許さない状態だったらしい。

祖父はその影響で、糖尿病を発症してしまった。祖父が食後にインスリンを自分で注射していたのには、そういう訳があったのだ。タバコも吸い、お酒も飲み、甘いものも大好きだった祖父にとって、病気を理由に生活を制限されるのは非常に苦しかったに違いない。その反動で、工作や日曜大工・車の改造・ラジコン製作など、病気でも問題なくできる趣味を見つけて、のめり込んでいたのだ。

ところが、祖父は余命宣告された時期を過ぎてもなお生き続けた。僕が遊んでもらっているときには、すでに余命宣告から五、六年も経過しており、いつ命が絶えてもおかしくない状態だったそうだ。だが、祖父は僕に対して、そのような大人の事情や病気の苦しみなどを一切感じさせず、あんなにも明るく、優しく、朗らかに接してくれていた。

最終的には、癌がんが膵臓すいぞうから胃に転移してしまい、入院して胃袋を全摘出することになった。僕が病室で見た、祖父の腹の傷はその時のものだ。術後、一度は回復の傾向を見せたものの、今度は癌が肺に転移してしまい、それが直接的な原因で、祖父は亡くなった。僕と遊んでくれていた間にも、病魔は祖父の体を着実に蝕むしばんでいたのだと思うと、背筋が凍った。

思えば、祖父は遊んでいるときに常々こう口にしていた。

「大人になったらな」

これは、孫が大人になるまで長生きしてみせる、という自分への激励だったのだと、十年の時を経て、ようやく理解した。

夕焼けを見ると、どうしても祖父の顔が頭をよぎり、やけに哲学じみたことを考えてしまう。家族が病気になる。入院する。治療の甲斐なく死ぬ。生き物なのだから、当然のことだ。しかも、祖父の場合は余命宣告をとくに過ぎていた。むしろ、僕と祖父が生きている状態で出会えたこと自体、奇跡に近い。本来ならば、そのことを喜ぶべきだ。

だが、頭でわかっていても、どうしても割り切れないことがある。お見舞いに行った時、祖父ときちんと話をしなかったこと。葬式の段階に至っても、祖父の死を頑なに認めずに、目を背けたこと。病気の苦しみを一切見せずに優しく接してくれた祖父に、お礼が言えなかったこと……。『後悔』という二文字でまとめ切れないこの思いを、どうしたらよいのだろうか。

そんなことを考えながら、窓の外をぼんやりと眺めていると、一言、

「お前はもつと前向きなことをしろ」

と、耳元で囁かれたような気がした。振り返ってみても、当然、そこには誰もいない。僕の幻聴だったか、あるいは……。

ふっ、と声に出さずに笑う。

（やっぱ、変えられないわな）

僕は視線を前に戻し、そして、シャーペンを再び握りしめる。十年も前の、取り留めのない会話。だが、それが間違いなく、今の僕を形作っている。後悔していることはいくらでもある。だが、それはもう過去のことだ。前向きに考えよう。まだ、今からできることがある。まだ果たしてない約束があるのだ。自分で自分にそう言い聞かせながら、ささっと進路希望調査の書類を仕上げる。

結局、もともと書いてあった進路を一度消して、もう一度書き直しただけだった。誰かと話をしたわけでも、何か新しい学びや気づきを得たわけでもない。ただ夕焼けを見て、過去のことを思い出し、ノスタルジーに浸っただけ。変わったことと言えば、机の上の消しゴム

のかすが増えたことと、書き直した分だけ用紙がよれてしまったことぐらいだった。

ふう、と息を出してシャーペンを置く。前向きに考えるというのは思いのほか、大変だ。もう一度、窓の外を見た。黄昏時はもう終わり、空はすでに黒く染まっていた。夕焼けが綺麗だった次の日は、晴れるらしい。

頭を使ったせいか、無性に甘いものが食べなくなった。

〈了〉